フィールド(現場)からの風 597

宮田守男

昨日は日本ペンクラブが、松尾芭蕉が「おくのほそ道」の旅に出た日として1988年に制定した「旅の日」。下野・陸奥・出羽・越後・加賀・越前など未知の地域を巡る旅で「夏草や 兵どもが夢の跡」「閑さや 岩にしみ入る 蝉の声」などの名句が詠まれた。

45歳にして約450里(1768キロ)に及ぶ旅程を踏破した芭蕉は、多くの地を旅して伊勢神宮に参拝した時は中川乙由に接し、伊勢派と呼ばれるまでに成長させるなど、句の楽しさを伝え続けた偉業は「旅は本人が楽しむだけでない」と旅の本質を語っているようだ。芭蕉に学んだ乙由は「針ありと 蝶に知らせん 花薔薇」と。何て優しい心持だと想わした句を詠んでいる。

今日の誕生花はジャガイモ。花言葉は「情け深い・恩恵」だが、我が家の野菜栽培ではジャガイモの花芽は全部摘み取る栽培方法だ。亡き母親から、花芽を摘むと保存の時に芽が出難いとの教えだが、「情け深い」という花言葉を知ると、罪深い栽培方法だと思ってしまう。

温暖化の影響への意識を持ち続けよう

菜の花に多くカメムシを発見し全国のカメムシ発生情報を検索したところ「カメムシ注意報」全国で続々、香川県では平年の94倍の大量発生との情報だ。一般的にカメムシの発生は隔年周期で今年は発生の多い「表年」。暖冬の影響で多くが越年し高温になると活動が活発になり、夏にかけてさらに増加するとの情報だ。

大北地域でもコメへの影響が大きく、年々水田化しない耕作地が増え続け個々の農家の防除だけでは困難な状況になっている。温暖化により農作物などの被害に地域全体で取り組む体制が求められている。

だが、空中散布防除は大きな課題を地域に与えることを考えなくてはいけない。アルベルト・アインシュタインは「もし地球上からハチが消えたなら、人間は4年しか生きることができない」との言葉を残している。ハチによる受粉がなければ栄養価の高いリンゴ・アーモンドなどが手に入りにくくなり、ハチが受粉した作物を食べる牛や羊もハチがいなくなれば乳製品なども高価に。また森の植物もミツバチの受粉により生きているが、ハチがいなくなれば森が消え、海の生物にも影響し、人間が食べる食料が不足すると。豊かな自然と共存することを常に意識すべきだろう。

吉沢篤さんに農地に一面に咲く花の名前を尋ねるとスマホ花検索で「ムスカリ」と。自然の楽しみ方を知る

(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)